



Title	パウロ『ローマ書』の構成と試訳
Author(s)	千葉, 恵; CHIBA, Kei
Description	この論文に対し、2013年3月に改定版が発表されています。このページの下部の「HUSCAP内関連資料」のリンクから、改定版をご覧ください。
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 120, 右1-右43
Issue Date	2006-11-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16880
Type	departmental bulletin paper
File Information	CulturalScience120-r1.pdf



パウロ『ローマ書』の構成と試訳

千 葉 恵

序

本書簡におけるパウロの思考様式の特徴は、ナザレのイエスにおいてユダヤ人のみならず人類全体にとって比類のない救いが出来事になった、つまりイエスがキリストであるというその一つの出来事に眼差しを注ぎつつ、旧約聖書との連関のなかで、また他の諸文化とも共約可能な語用を援用しつつ、福音を宣教したことにある。しかも福音の宣教が、同時に、彼の論敵とりわけ律法主義者、ユダヤ主義的キリスト者に対する論駁になっていることにある。なぜなら、パウロによれば、イエス・キリストの出来事は律法による支配を終わりにし、異邦人にもユダヤ人にも開かれた救いの訪れだからである。すなわち、パウロにおいて宣教とはその出来事において啓示された神のユダヤ人そして異邦人に対する認識、判断そして行為を伝達することであり、しかもその出来事を通じて神の意志を明らかにする彼の宣教という言語行為そのものが論敵の挑戦に応答するそのような思考の展開となっている。

従って、この翻訳の試みにおいて、パウロがイエス・キリストの出来事に集中して紡ぎだす言葉は、まず神により

その語、文により理解されていることがらを指示することを意図しており、その神の人間認識、判断の啓示に伴い、人間の心的状態がそれに随伴しても構わないが、基本的にはパウロは神の前の人間の現実をまず開示していることを念頭において訳出した。また、彼がこの出来事の上に立つ信徒の自己認識、希望の生について記述するとき、そこでも眼差しはイエス・キリストにおいて神によって理解されている自己との関連で生身の自己に眼差しが注がれ言葉が紡がれていることに留意した。他方、命令形の使用に見られるように、彼において切り開かれた新しい現実に生きることも古い自己に留まることも可能なローマの信徒に代表される自由と責任のもとにある生身の人間に眼差しを注ぎつつ言葉を紡ぐときは、他の文化とも共約可能なパウロによる人間一般の認識が前提にされていることに留意した。

『ローマ書』の構成

第一部 一章～第六章 律法とイエス・キリストにおいて啓示された二つの神の義と、そのもとにある神の前の罪人と義人。罪人と義人の可能存在としての命令法のもとに語りかけられるローマの信徒に代表される生身の人間。

一章・一節～一五節 ローマの信徒への挨拶

一～六 自己紹介。使徒であることとその職務（異邦の民への「福音」すなわち神人イエス・キリストにおける救いの出来事の宣教）。

七 ローマの信徒への挨拶

八～一五 ローマ宣教の計画と目的。

一章・一六〜一七 主題の提示。神の義、福音、信実そして救いの関わりの要約的言明。「神の義は福音において〔ご自身の〕信実に基づき信実に対し啓示されている」。

一章・一八〜三章・二〇 律法のもとにある人間の神の前の現実。神が義であることの第一証明、律法を通じた神の裁きによる証明。

一八〜三二 神の神性の自然による啓示に対する不敬虔者に弁解の余地がないこと、その結果としての性的放縱はじめ、もろもろの欲望への引渡しとしての怒りの啓示。

二章・一〜一六 誰の心にも律法の業が書き込まれていることは最後の審判の日に良心が共同の証人となり明らかになること。それ故に、ユダヤ律法の知と無知にかかわらず、律法を行う者が義とされること。「神はおおのにその業に応じて報いるであろう」。

一七〜二九 ユダヤ人は「律法に知識と真理の型」があるとし、律法を誇りつつ違反し、神を侮辱していること。
三章・一〜八 ユダヤ人の優越と罪をめぐり神の信実そして神の義を疑う論敵への反駁。

九〜一八 義人がいないことの（旧約）聖書に基づく論証。

一九〜二〇 律法の存在理由。律法の業に基づいては誰も神の前で義とされないことを明らかにし、神に服させること。

三章・二一〜六章・一〇 福音のもとにある人間の神の前の現実。イエス・キリストにおける神自身の信実と義の啓示、およびひとの信実と義の啓示。その旧約聖書における先駆および義認の根拠としての復活。さらに、恩恵の上に立つ者の信仰における希望と喜び。

二二～二六 主題（一章・一六、一七）の展開・その一

神が義であることの第二証明、福音によるすなわち「イエス・キリストの信実」による証明。罪人であるすべての人間に対し忍耐と寛容を持ち続けた神がイエス・キリストの「贖い」の出来事を通じて「無償で」信じる者を義とする。神はイエス・キリストの信実を通じて彼をその血において自らの義の顕現の場として晒した。さらに、神は「イエスの信仰に基づく」と神がみなす者を義とする。

二七～三一 主題の展開・その二

ひとは律法の業を離れイエス・キリストの信実により義とされること。神はユダヤ人そして異邦の民双方の唯一の神であり、異邦の民がイエス・キリストの信実を媒介にして義とされるように、ユダヤ人も信仰・信実により義とされること。そしてイエス・キリストの信実による義は「律法を確立する」。

四章・一～二四 信仰・信実による義認の（旧約）聖書に基づく論証および義認の根拠としての復活。

ユダヤ人の先祖アブラハムとダビデにおける信仰義認。「働きのない者であり、不敬虔な者を義とする方を信じる者には、彼の信仰が義とみなされる」。

主イエスを死者から甦らせた方を信じる者の義が「彼（アブラハム）には義とみなされた」という発言に含意するよう「意図」されている。「主イエスはわれらを義とするために甦らされた」。

五章・一～一一 イエス・キリストの信実により切り開かれた恩恵の上に立つからこそ、信徒は信仰において恩恵に近づきを得ている。罪人との「和解」という「神の愛」を聖霊の注ぎにより受け義とみとめられた信徒の平安、希望そして喜び。

一二〜二一 ひとりの罪過を介した罪の定めに対抗するひとりの義を介した生命の義の満ち溢れ。恩恵がイエス・キリストを通じて永遠の生命に至るべく義を通じて支配する。

第六章・一〜三 罪が増すところ恩恵が満ち溢れるなら罪に留まろうと主張する論敵への反駁。キリストの「生命の新しいさ」のなかに歩むべく、「彼と共に埋葬された」。

四〜一〇 キリストの死は罪に対する最終的な死であり、彼の復活の生は神に対する生。イエス・キリストにおける生と死に対する、その似本性における「一致」。

第六章・一一〜二三 イエス・キリストの信実において義とされたことを受けて、新しい生に関する使徒による信徒への命令と永遠の生命獲得への励まし。

一一〜一四 四つの命令。イエス・キリストの生と死が信徒自らのものであるという恩恵がいかなるものであるかの論証を経て、今や使徒は新しい生がいかなるものであるべきかをローマの信徒に命令する。（命令形は受け手がそれに従うことも従わないこともできることを前提にしている）。

一五〜二三 恩恵のもとにあるのだから罪を犯そうと主張する論敵への、罪から自由にされ義に奴隷とされた事実に基づく反駁。「自由」と「奴隷」という表現は「人間的な」語り。「今や、汝らは罪から自由にされ神に仕えており、聖なるものに至る汝らの果実を持っている。その終局は永遠の生命である」。

第二部 七章〜八章 魂の二重構造。身体を持つ者の自然的生の原理である肉に即した生と死すべき身体を介しての霊に即した生。

七章・一〜二五 律法の業とは別に福音の啓示を受けて、律法の新しい役割と新たな位置づけ。律法のもとにある人

間はいかなる状態にあると神に理解されているか。罪の苦悩。

一〇六 「キリストの身体を通じて律法に死んだ」。律法から解放され、「霊の新しさ」において、神に「実を結ぶ者」となる。

七〇一二 律法は罪ではないかという論敵への反駁。律法の新たな位置づけ。一方、罪は律法を利用しひとを欺くが、他方、律法はその欺きを通じて、罪を明らかにし、ひとに罪の自覚を促す。

一三〇二四 罪の苦悩。聖にして霊なる律法に同意する「われ」と欲せざる悪を為すわがうちに宿る罪の争克。罪のもとに売られている「われ」|| 「人間」がいかに「惨め」か。

二五 「われ」の二重性。「心において神の律法に仕え、他方肉において罪の律法に仕える」。

八章・一〇三八 霊に即した生はいかなるものか。被造物全体の身体の贖いと御霊の執り成しそして神の子の栄光へ。

一〇三 生命の霊の法則による罪と死の法則からの解放。「キリスト・イエスにある」と神に理解されている信徒はいかなる状態にあるか。「いかなる罪の定めもない」。なぜなら、「神は自らの御子を遣わし・・肉のうちにある罪を罰した」からである。

四〇一一 「霊に即して歩む者」と「肉に即して歩む者」の対比。律法の義の要求は前者により満たされる。「キリストが汝らのうちにあるなら、かたや身体は罪の故に死であるが、霊は義の故に生である」。霊に即して歩むとき、死すべき身体も生きるものとなるであろう。

一二〇一七 神の霊に導かれる者は「神の子」と呼ばれる。

一八〇三〇 被造物の呻きと聖霊の執り成し。霊の初の実を持つ信徒も身体贖いを待ち望みつつ呻いている。

聖霊が呻きをもつて執り成している。神は予め定めた者たちに呼びかけそしてその者たちを義とし、さらに栄光を与えもした。

三一〜三八 イエス・キリストにおける神の愛から信徒を引き離すものは何もない。

第三部 九章〜十一章 業ではなく恩恵により神から賜わる義と救いをめぐるイスラエルと異邦の民の歴史の帰趨。

九章・一〜十一章・三六 福音において啓示された異邦の民の召しと義認と栄化を受けて、イスラエルの歴史はこの出来事といかなる関わりにあるか。

一〜五 使徒のイスラエルに対する願い。

六〜一八 (旧約) 聖書における神の選びの系譜。

一九〜二九 神の自由と忍耐そして憐れみ。「怒りの器」への寛容と忍耐そして「憐れみの器」にご自身の栄光の富を知らしめる。

三〇〜一〇章・二一 イスラエルの躓き。義を律法の業により追求する神の義の誤解および神の義への不服従。

律法に基づく義と信仰に基づく義の(旧約)聖書における対比。「信仰の言葉」|| 「言葉は汝の近くにある、汝の口にそして汝の心にある」。聞くこと、宣教することそして聞き従うこと。

十一章・一〜一二 イスラエルの救済の可能性の論証。

一三〜二四 異邦の民へのオリブの木の接木による警告。

二五〜三二 イスラエルの救い。

三三〜三六 神の救済の知恵に対する賛美。

第四部 一二章～一六章 福音が出来事になったからこそ命じられうるキリストの身体としての信徒の生。

一二章・一～一五章・一三 神への聖なる献げものとしての生がいかなるものであるかのローマの信徒への指針と勧め。

一～二二 キリストにあつて一つの身体である信徒の異なる賜物の愛による使用。

一三章・一～七 神の補佐として派遣されている現今の政治権力への服従の勧め。

八～一〇 愛が律法の成就であること。

一一～一四 光の武器としてのイエス・キリストを着ることにより闇の業に打ち勝て。

一四章・一～一五・一三 信仰において強い者と弱い者をめぐる勧め。

一～一六 食物と特別な日をめぐる争いに対する調停。

一七～二三 躓きの克服としての神の国と信仰の何であるかの確認。「汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持つ」。

一五章・一～一三 キリストを模範とする勧めと信徒がキリスト・イエスにおいて同じ思いを持つよう神への祈願。

一五章・一四～一六章・二三 使徒からローマの信徒への今後の計画および祝福。

一四～二一 使徒自身の宣教の働きの理解を求める。

二二～二九 ローマ旅行およびエルサレム経由の理由。

三〇～三三 祈りの結集への呼びかけと祝福。

一六章・一〜二三 付録―紹介状。

『ローマ書』試訳

凡例

一、底本に NESTLE-ALAND NOVUM TESTAMENTUM GRAECE 27revidierte Auflage (Stuttgart 1993) を用いた。THE GREEK NEW TESTAMENT Third Edition (corrected) ed. Kurt Aland et aliter, (United Bible Societies 1983) を参照した。両者のあいだに語彙上の読みの差異はない。大文字と小文字、句読点および旧約の引用箇所を理解に差異がある。頌栄（一六章二五―二七節）は後の加筆であり訳出しない。

二、「……」は訳者による補いである。

三、旧約聖書からの引用は NESTLE-ALAND 版に従い、引用文は「……」により示した。（ただし、三・八、四・二五、八・一五、九・一九、一一・一九の直接文は旧約聖書からの引用ではないが「……」を付した）。

四、*πίστις*（ピスティス）の訳語「信実 (faithfulness)」および「信仰 (faith)」について。「神のピスティス」(三・三) はユダヤ人に対し、彼らの不信実と対照的に、「ご自身の「言葉」を「信任」し、「真実」であり「偽り」を言うことなく、約束に忠実であったという文脈において用いられるので、また「信仰」を神に帰属させることはできないので、「信実」と訳す。本試訳においては、神のひとへの愛、憐れみに基づく信実が基本的な「ピスティス」の用法であるとする。神がイエス・キリストにおいて罪人に対して信実であったが故に、ひとはその憐れみに基

づく信実を「信じる」、「信仰する」ことによって、その神の信実に対応するつまり神に「よし」とみなされる「信実」であると解する。

「ピステイス」にはこのようにまず神のピステイスに眼差しが注がれ「愛」同様人格的交わりの根源語として用いられる場合と、ひとが知識に到達していないという認知的状態を前提にその信実に対応する根源的な行為として用いられる場合がある。後者の場合においても「信じる」対象への信頼等人格的なものを含意している。訳語としては認知的要素が不可避な場合、つまり知識との関連においてそれに到達していない状態が問題になる文脈においては名詞形は「信仰」動詞形は「信じる」とする。そのさいにおいても、留意すべきことはその語は信実、誠実そして信頼等人格的な交わりの要素を含意していることである。なぜなら、この語は肯定的な人格的根源語に基づき用いられるからである。根源語とは生のあらゆる行為にその語の指示するものが指導原理として浸透しうるそのような語を言う。「信仰」はその意味で他のより上位の概念により説明されない。ただ、啓示された神の「信実」に応答する生の原理を表現する。

「イエス・キリストのピステイス」(三・二二)について。職名「受膏者・救い主」を伴う固有名「イエス・キリスト」は固有名「イエス」(例、三・二六)や「キリスト」(例、一四・九、一五・三)の用法とは異なり行為主体(「イエス・キリストが……する(した)')とされることはない。パウロは神でもひとでもある存在者に一つの行為を帰属させることができなかつたからである。「イエス・キリスト」は常に場所や媒介の前置詞「において」や「通じて」、「即して」を伴い、出来事の範疇において理解されている。例えば、「神の子イエス・キリストは然りと否にならなかつた、むしろ彼において然りがなつたのである」(第二コリ、一・一九)参照。従って、「イエ

ス・キリストの「信実」の属格は主格的でも目的的でもさらに「神秘的（靈的交わりの）」属格でもなく、出来事の属格と解すべきである。イエス・キリストにおいて出来事になった「信実」が、それも直接的には神の信実が、そして間接的にはひとの信実双方がこの句において指示されている。

五、神による認識、判断、行為が客観的な仕方でも叙述される場合には尊敬語を用いない。パウロ個人による神への願望、感謝そして賛美が含意されている場合には尊敬語を用いる。

第一章

キリスト・イエスの僕パウロ、神の福音へと定め分かれたれ、召されて使徒なり。^一その福音は聖なる書に彼の預言者たちを通じてはるか以前に約束されたものであり、^二肉によればダビデの子孫から生まれた彼の子について、^三聖なる靈によれば死者たちの甦りに基づき力のうちに神の子と定められた、われらの主イエス・キリストについてのものである。^四われらはその御子を通じて彼の御名のためにすべての異邦の民のあいだで、信仰の従順に導く恩恵と使徒職を得たのであり、^五汝らもまたそのひとびとのなかで召されてイエス・キリストのものである。^六ローマにいる神に愛されたすべてのひとびとに、召された聖徒たちに、われらの父なる神からそしてわれらの主なるイエス・キリストから恩恵と平安が汝らにあるように。

^七始めに、汝らの信仰が全世界に告知されていることを汝らすべてについてイエス・キリストによりわが神に感謝する。^八それ、神こそ彼の御子の福音において、われわが靈において拝する、わが証人なれば。絶えざるわが祈りにお

いて、われただちにかいかにかして神の御心において汝らのもとに赴きうるか祈りつつ、われ常に汝らに思いを寄せる。^二なぜなら、汝らを強めるため何がしか汝らと霊の賜物を分かち合うべく、われ汝らにまみえることを、^三すなわち汝らとわれ互いの信実を介してわれ汝らと共に励まされることを欲するからである。^三しかし、兄弟たち、われ汝らのあいだでも残りの異邦の民におけると同じく、何がしかの果実を得るために、しばしば汝らに赴くべくことを進めたが、今日まで妨げられたのを汝らに知られずにいるのを欲しない。^四ギリシア語圏の者にも異言語圏の者にも、知者たちにもまた愚かな者たちにもわれ負うべき責めを持つ。^五このように、わが熱心はローマにいる汝らにも福音を伝えることである。

^{一六}というのも、われ福音を恥とせぬからである。なぜなら、福音はまずユダヤ人そしてギリシア人にもすべて信じる者に救いをもたらす神の力だからである。^{一七}すなわち、神の義は福音において「ご自身の」信実に基づき信実に対し啓示されている。そのことはまさにこう書いてある、「信実に基づく義人は生きるであらう」。

^{一八}なぜなら、神の怒りは天から、不義のうち真理をはばむすべての不敬虔と不義のうえに啓示されているからである。^{一九}それ故に、神の知られるべきことからは彼らに明らかである。なぜなら、神が彼らに明らかにしたからである。^{二〇}すなわち、神の見えざることから、彼の永遠の力そして神性は世の創造から、被造物において思考されるものであり、見て取られており、その結果彼らは弁解の余地なき者である。^三それ故に、彼らは神を知りつつ神として栄光を帰し或いは感謝することがなかった。むしろ、彼らは思いにおいて空しきものとなりそして彼らの悟りなき心は暗くされた。^三彼らは知者であると称し愚かな者となった。^三彼らは神の不朽の栄光を朽ちるべき人間のそして鳥や動物そして這うものの像の似姿に変えた。

二四それ故に、神は、彼らの身体が彼らの心の欲望において自らのあいだで辱められるべく、彼らを不潔へと引き渡した。二五或る者たちは神の真理を偽りに取り換えそして創造者から離れ、被造物を崇拜しかつそれに仕えた。その創造者こそ永遠に褒め称えられるべき方である、アーメン。二六それ故に、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡した。というのも、彼らの女たちは自然の用を不自然なものに取り換えた。二七同様に、男たちも女との自然の用を捨てて互いに自らの欲のままに情欲に身を焦がした。男は男と恥ずべきことを行いそして自ら自分たちの逸脱に値する報いを受け取っている。二八彼らが知識のうちに神を持つことを識別しなかつたほどに、神は彼らを相応しからざることを為すべく腐敗した思考に引き渡した。二九彼らはあらゆる不義で邪悪な悪しき欲望に満たされ、妬み、殺人、喧嘩、裏切り、卑しさに満ちた者である。三〇悪口する者、神を憎む者、高ぶる者、自惚れる者、傲慢な者、悪をたくらむ者、親に不従順な者、三〇悟りなき者、不忠実な者、愛情なき者、無慈悲な者である。三二或る者たちは、このようなことどもを行う者たちは死に値すると、神の義しきことを知りながら、ただそれらを行うだけでなく、行う者たちを是認している。

第二章

それ故に、ひとよ、すべて裁く者、汝には弁解の余地がない。なぜなら、汝は他人を裁くことからにおいて、汝自身を罪に定めているからである。というのも、汝裁く者は同じことを行っているからである。三しかし、われら知る、真理に即した神の審判がそのようなことを行う者たちのうえにあると。三そのようなことを行う者たちを裁きそして同じことを行っている汝ひとよ、汝は神の裁きを逃れると思うのか。四それとも汝は、神の憐れみが汝を悔い改めに

導くのを知らずに、ご自身の憐れみの富と忍耐そして寛容を軽んじるのか。^五汝の頑なで悔い改めなき心に応じて、汝は汝自身に怒りの日に、つまり神の義しき裁きの啓示の日に怒りを蓄えている。^六神はおのおのその業に應じて報いるであろう。^七かたや、忍耐に即して善き業の栄光と名誉と朽ちざることを求める者たちに永遠の生命を報い、^八他方、利己心から真理に服せず、不義に服する者たちには怒りと憤りがあるであろう。^九ユダヤ人をはじめギリシア人にも、悪を働く人間のすべての魂に苦しみと災いがある。^{一〇}しかし、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、すべて善を働くすべての者には栄光と名誉と平安がある。^{一一}それ、神にはかたより見ることないからである。^{一二}誰であれ律法なくして罪を犯す者は、律法なくして滅び、そして律法のうちに罪を犯す者は律法を通じて裁かれるであろう。^{一三}というのも、律法を聞く者が神の前に義であるのではなく、律法を行う者たちが義とされるであろうからである。^{一四}律法を持たない異邦の民が自然に律法のことから行う時、その者たちは律法を持たずにも自らに対し律法なのである。^{一五}^{一六}ひとは誰であれ自らの心のなかに律法の業が書かれてあることを証明するが、それは、或る日、神がキリスト・イエスによるわが福音に即してひとびとの隠れたことからを審判するときであり、自らの良心が共同の証人となり、そして自らのあいだで互いに告発しまた弁明することによってである。

^{一七}しかし、もし汝が自らをユダヤ人と称し、律法に安んじかつ神において誇り、^{一八}その意志を知りそして律法に基づき教えつつ、重要なことからを識別しているのなら、^{一九}^{二〇}知識と真理の型を律法のうちに持つ者であり、汝自身盲人の導き手、闇のなかにいる者たちの光、思慮なき者たちの教育者、子供たちの教師であると自認しているのなら、^{二一}それではどうして他人を教えつつ自らを教えないのか。盗むなど説教しながら盗むのか。^{二二}姦淫するなど語りながら姦淫するののか。偶像を忌み嫌いながら宮のものを奪うのか。^{二三}律法において誇りながら、律法の違反を通じて神を侮

辱すのか。^{二四} というのも、まさにこう書いてある、「神の御名は汝らのゆえに異邦の民のあいだで侮辱されている」。^{二五} すなわち、かたや、もし汝が律法を實踐するなら、割礼は有益である。もし、汝が律法の違反者であるなら、汝の割礼は無割礼となったのである。^{二六} だから、もし無割礼者が律法の義「の諸要求」を守るなら、その者の無割礼は割礼とみなされるのではないのか。^{二七} 律法を満たす生来の無割礼者が文字と割礼を媒介にしてはいるが律法の違反者である汝を審判する。^{二八} なぜなら、外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また外見上の肉における割礼も割礼ではなく、^{二九} 隠れた姿におけるユダヤ人そして霊における心の割礼が、その称賛がひとびとからではなく神からのものだからである。

第三章

それではユダヤ人の優っているところは何かあるのか、或いは割礼者の強みは何かあるのか。^一 あらゆる点で大いにある。第一に、神の言葉が彼らに信任されたことである。^二 ではどうか、もし誰かが不信実であったなら、その者たちの不信実が神の信実を無効にするのか。^三 断じて然らず。神を真実とせよ、すべての人間を偽り者とせよ。まさにこう書いてある、「汝が汝の言葉において義とされるように、そして汝が審判されることにおいて勝利するように」。^四 五しかし、もしわれらの不義が神の義を確立するなら、われらは何と語ろうか。怒りをもたらず神は不義ではないのか。人間的にわれ言うのだが。^六 断じて然からず。なぜなら、その場合には、神はいかに世を裁くのか。^七 しかし、もし神の真実がわが偽りにおいてご自身の栄光へと彌や優ったのなら、何故われなお罪人として裁かれるのか。^八 そしてわれら

が、それは、先に生じた諸々の罪に対する神の忍耐における軽減を介して、今という好機にご自身の義の証示に向けて、ご自身が義であり、さらにイエスの信仰に基づく者を義とするためである。

^{二七}それでは、誇りはどこにあるのか。排除されてしまった。どのような律法を介してか。業のか。そうではなく、「神の」信実の律法を介してである。^{二八}なぜなら、われらは、ひとは律法の業なしに「イエス・キリストの」信実によって義とされると考えるからである。^{二九}それとも、神はユダヤ人だけのものであるのか。そうではなく異邦の民のもあるのか。そのとおり、異邦の民でもある。^{三〇}いやしくも神はひとりであり信仰に基づく割礼者を、そしてその「イエス・キリストの」信実を通じて無割礼者をも義とするであろうなら。^{三一}それでは、われらはその「イエス・キリストの」信実を通じて律法を無効にするのか。断じて然からず。むしろわれらは律法を確立する。

第四章

それでは、肉におけるわれらの先祖アブラハムが見いだしていたものは何であるとわれらは語ろうか。^二というのも、もしアブラハムが業に基づき義とされていたなら、なるほど彼は誇りを持つ、しかし、それは神に対してではないからである。^三実際、書は何と言っているか、「アブラハムは神を信じた、そしてそれが彼に義とみなされた」。^四働く者にはその報酬は恩恵によるのではなく、当然のものともみなされる。^五しかし、働きのない者であり、不敬虔な者を義とする方を信じる者には、彼の信仰が義とみなされる。^六ダビデもまた神が業なしに義とみなすところのその人間の幸福をまさにこう語っている、^七「その不法が赦された者たちは幸いである。そしてその罪が覆われた者たちは幸いで

ある。^八主がその罪をみとめない者は幸いである。^九それでは、この幸いは割礼者のうえにあるのかそれとも無割礼者のうえにもあるのか。というのも、「アブラハムにその信仰が義とみなされた」とわれらは語るからである。^{一〇}それでは、彼はどのようにしてそうみなされたのか。彼が割礼のうちにあることによつてか、それとも無割礼のうちにあることによつてか。彼が割礼のうちにはなく無割礼のうちにあることによつてである。^{一一}彼は割礼者の印を受けたが、それは無割礼者における信仰の義の証印であり、彼自身が無割礼を通じて信じる者たちすべての父となるためであり、彼ら自身義とみなされるためである、^{一二}すなわち単に割礼に基づく者たちにとつての割礼ある者の父であるだけでなく、無割礼のうちにわれらの父アブラハムの信仰の足跡を歩む者たちにとつても父となるためである。

^{一三}なぜなら、アブラハム或いは彼の子孫に対する、自らが世の相続人であるという約束は律法を介してではなく、信仰の義を介するものだからである。^{一四}というのも、もし律法に基づく者たちが相続人であつたなら、信仰は空しいものとなつておりそして約束は無効とされているからである。^{一五}なぜなら、律法は怒りをもたらすからである。しかし、律法のないところには違反も存在しない。^{一六}それ故に、「相続人が」信仰に基づくのは、恩恵に即するためである、その結果、ただ律法に基づく者だけではなく、われらすべての父であるアブラハムの信仰に基づく者にとつても、すべての子孫に対する約束が確かなものとなる。^{一七}それはまさに「われは多くの異邦の民の父として汝を立てた」と書いてあるとおりであり、その方の前で、彼は、死者たちに生命を与えそして存在しないものどもを存在するものとして呼び出す神を信じたのである。^{一八}その彼は望みを超えていたが望みのうえに、自ら「汝の子孫はこのようになるであらう」と語られたことに即して多くの異邦の民の父となることを信じた、^{一九}そして彼は、信仰において弱ることなく、自らの身体がおよそ百歳になつており既に死んだ状態となつてゐること、そしてサラの胎が不妊であることを認

識した。^{二〇} 彼は神の約束を不信のうちに疑うことなくむしろ神に栄光を帰しつつ、約束されたことはありうることでありそして為しうることであることを十全に納得しつつ、信仰により強められた。^{二三} 彼には義とみなされたのである。^{二三} 「彼にはみなされた」とは彼自身だけのために書かれたのではなく、^{二四} われらのためでもある、われらの主イエスを死者たちから甦らせた方のうえに信をおく者たち、その者たちに「みなされるといふこと」をそれは意図している。^{二五} その彼はわれらの背きのために引き渡され、そしてわれらの義のために甦らされたのである。

第五章

かくして、われらは信仰に基づき義とされたので、われらの主イエス・キリストを通じて神に対して平和を持っている。^二 その方を通じてわれらは、そこにわれらが立ちかつ神の栄光の希望のうちに誇っているその恩恵に対して信仰において近づきを得ている。^三 それだけではない、艱難においてもわれらは誇っている、艱難は忍耐をもたらし、^四 忍耐は確かな陶冶を、確かな陶冶は希望をもたらしことを知っているからである。^五 しかし、希望は失意の恥を負わしめない、なぜなら神の愛はわれらに賜った聖霊を通じてわれらの心に注がれているからである。^六 なぜなら、キリストはわれらがまだ無力であるときに、時至つて、不敬虔な者たちのために死んだからである。^七 というのも、誰かひとが義人のために死ぬということはほとんどないからである。実際、或るひとは善き恩人のためにあえて死ぬことがあるかもしれない。しかし、キリストはわれらがまだ罪びとであるときわれらのために死んだ、そのことにより神はわれらにご自身の愛を示したのである。^九 かくして、今や、われらは彼の血において義とされたのであるから、さらに一層彼

を通じて怒りから救われるであろう。^{一〇}なぜなら、もし、われらは、われらが敵であったときに、神と、ご自身の御子の死を通じて、和解させられたのであるなら、さらに一層、われらは、和解させられたものとして、彼の生命において救われるであろう。^{一一}しかし、ただそれだけではない、われらはその方を通じて今や和解を得たそのわれらの主イエス・キリストを通じて神において誇ってもいる。

^{一二}それ故、ひとりのひとを通じて罪が世に入りそして罪を通じて死が入ったように、そのようにすべての者が罪を犯したが故に、死はすべての者に入ったのである。^{一三}というのも、律法「が与えられる」までにも罪は世にあったのであり、律法が存在しないため罪は告訴されていないが、^{一四}しかし、死は、アダムからモーセに至るまで、アダムの背きと同じ仕方て罪を犯さなかった者たちをも支配したからである。彼は来るべき方の型である。

^{一五}しかし、罪過があるのと同様の仕方て、賜物もあるのではない。というのも、もしひとりの罪過により多くの者たちが死んだのなら、神の恩恵そして恩恵における贈り物は、ひとりのひとイエス・キリストの贈り物によつてさらに一層多くの者たちに満ち溢れたからである。^{一六}そして贈り物は罪を犯したひとりを媒介にしたものごとくではない。なぜなら、一方ひとりに基づく審判は罪の定めになっていたが、多くの罪過に基づく賜物は義に至るからである。^{一七}なぜなら、ひとりの罪過により死がひとりを通じて支配したなら、さらに一層恩恵と義の贈り物の満ち溢れを受け取る者たちはひとりのイエス・キリストを通じて、生命のなかで支配するであろうからである。^{一八}それ故に、かくして、ひとりの罪過を通じて罪の定めに至ることすべての人間におよぶように、そのようにひとりの義を通じて生命の義に至ることもまたすべての人間におよぶ。^{一九}というのも、ひとりの人間の不従順を通じて多くの者が罪びとに定められたように、そのようにまたひとりの従順を通じて多くの者が義と定められるであろうからである。^{二〇}しかし、律法が

到来したのは罪過が増すためである。しかし、罪が増したそのところで、恩恵がより満ち溢れた、^三それは罪が死において支配したように、そのようにまた、恩恵が、われらの主イエス・キリストを通じて永遠の生命に至るべく、義を通じて支配するためである。

第六章

それでは、われらは何と語ろうか。われらは、恩恵が増すべく、罪に留まろうか。^二断じて然らず。罪に死んだ者であるわれらがいかになお罪に生きるであろうか。^三それとも汝らは知らぬか、キリスト・イエスへと洗礼された者であるわれらは彼の死に洗礼されたことを。^四かくして、われらは死への洗礼を介して彼と共に埋葬された、それはまさにキリストが父の栄光を介して死者たちから甦らされたように、そのようにわれらもまた生命の新しいのなかに歩むようになるためである。^五なぜなら、もしわれらが彼の死の似にようせい性性に一致したものとなつたのなら、復活のそれにもなるであろうからである。^六われらは、われらの古きひとと共に十字架につけられたことを知っている、それはこの罪の身体が減び、もはやわれらが罪に仕えることがないためである。^七それはすでに死せる者は、罪から「離れ」義とされているからである。^八もしわれらがキリストと共に死んだなら、また彼と共に生きるであろうことをわれらは信じる。^九キリストは死者のなから甦らされてもはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことをわれらは知っているからである。^{一〇}なぜなら、彼が死んだ死とは、罪に対して一度限り死んだところのものであり、他方、彼が生きる生とは、神に対して生きるどころのものだからである。

二かくして汝らも自らが罪に対しては死んでおり、キリスト・イエスにおいて神に対して生きているものであると
考えよ。三かくして、罪をして汝らの死すべき身体において、その欲望に従わすべく、王たらしめるな。四汝らの肢
体を不義の武器として罪に捧げるな、かえって、汝らは、あたかも死者から生きていますものであるかのごとくに、自
らを神に捧げよ。そして汝らの肢体を義の武器として神に捧げよ。五なぜなら、罪は汝らの主人とはならないであ
るからである。それ、汝らは律法のもとにはなく恩恵のもとにあるからである。

六それでは、どうか。われらは罪を犯そうか、われらは律法のもとにはなく、恩恵のもとにあるのだから。断じ
て然らず。七汝ら知らぬか、汝らが自らを奴隷として従がうべく捧げるその者に、死に至る罪のあれ、義に至る従
順のあれ、汝らは汝らが服従するその者にとって奴隷であることを。八しかし、神における恩恵は、汝らは罪の奴
隷であったが、汝らが心から手渡された教えの型に服従し、九罪から自由にされ義に奴隷とされたことである。一〇わ
れ汝らの肉の弱さの故に人間的なことを語る。なぜなら、汝らは汝らの肢体を不法に至る不潔と不法に奴隷として捧
げたごとく、今や汝らの肢体を聖さに至る義に奴隷として捧げたからである。一一というのも、汝らは罪の奴隷であ
ったとき、義に対しては自由であったからである。一二では、そのとき、汝らはいかなる果実を得たのか。それは今では
汝らが恥としているものである。なぜなら、かのものどもの終局は死だからである。一三しかし、今や、汝らは罪から
自由にされ神に仕えており、汝らの聖さに至る果実を持っている、その終局は永遠の生命である。一四なぜなら、罪の
支払いは死であるが、神の賜物はわれらの主イエス・キリストにある永遠の生命だからである。

第七章

それとも、兄弟たち、われは律法を知る者たちに語りかけているのであるが、汝らは知らぬか、律法がひとを支配するのは、そのひとが生きている限りの時であると。^二なぜなら、既婚の婦人は生きている夫に律法により縛られているのだから。しかし、もし夫が死ねば、彼女は夫の律法から解放されている。^三だからそれ故、夫が生きているあいだに、他の男のものになるなら「姦通者」と呼ばれるであろう。しかし、夫が死ねば彼女は律法から自由であり、彼女が他の男のものになっても姦通者ではない。^四従つて、わが兄弟たち、汝らも死者たちから甦らされた他の方のものとなるべく、キリストの身体を通して律法に死んだのであり、それはわれらが神に対し実を結ぶ者たちとなるためである。^五われらが肉にあつた時、律法を通じての罪の欲情が、死への実を結ぶべくわれらの肢体に働いた。^六しかし、今や、われらは霊の新しさにおいてそして文字の古さにおいてではなく仕えるべく、われらがそこに閉じ込められたもののうちに死にその律法から解放された。

^七それではわれらは何と言おうか。律法は罪であるのか。断じて然らず。しかし、われは律法によらなければ罪を知らなかった。なぜなら律法が「汝貪るな」と言わずば、われ貪りを知らなかったからである。^八しかし、罪は戒めを通じて機会を捕らえわがうちにあらゆる貪りを引き起こした。なぜなら、律法なしには罪は死んでいるからである。^九しかし、われかつて律法なしに生きていた。しかし、戒めが来るや罪は生き返つた。^{一〇}だが、われは死んだ、そして生命に至らず戒め自らが死に至らすものとわがうちに見いだされた。^二なぜなら、罪が戒めを介して機会を捕らえわれ

を欺きそれにより殺したからである。^二従つて、かたや律法は聖でありまた戒めも聖であり義であり善である。

^三それでは善きものがわれに死となつたのか。断じて然らず。むしろ罪が善きものを通じてわれに死をもたらすことにより、罪が明らかになるためであり、罪が戒めを通じて著しく罪深いものとなるためである。^四なぜなら、われら知る、律法は靈的なものであると、しかしわれは肉のなものであり罪のもとに売り渡されている。^五というのも、われわが為すことを知らざればなり。すなわち、われ欲することをわれ為さず、憎むそのことを為すからである。^六しかし、もしわれ欲せざることを為すなら、律法にそれが善きものであると認めている。^七しかし、今やもはや、われそれを為すにあらざり、わがうちに宿る罪が為す。^八なぜなら、わがうちにつまりわが肉のうちに善きものの宿らぬことを、われ知るからである。すなわち、善美を欲することはわれに備わるが、それを為すことがない。^九なぜなら、欲する善をわれ為さず、欲せざる悪をこれわれ為すからである。^{一〇}しかし、もしわれ欲せざるそのことを為すなら、もはやわれそれを為さず、むしろわがうちに宿る罪が為す。^{一一}かくして、善美を為すことを欲するわれにおいて、悪がわれに備わるという律法をわれ見いだす。^{一二}なぜなら、われ内なる人間に即しては神の律法に同意しているからである。^{一三}しかし、わが肢体のうちに他の律法を見る、それはわが心の律法に対し戦いを挑んでおりそしてわが肢体のうちにあつて罪の律法のうちにわれを囚えている。^{一四}惨めだ、われ、人間。誰がこの死の身体からわれを救い出すであらうか。^{一五}しかし、われらの主イエス・キリストを介して神に感謝「あれ」。それ故、かくして、われ自らかたや心において神の律法に仕え、他方肉において罪の律法に仕えている。

第八章

かくして、今や、キリスト・イエスにある者たちにはいかなる罪の定めもない。^二なぜなら、キリスト・イエスにある生命の霊の律法が汝を罪と死の律法から解放したからである。^三というのも、ひとが肉を介してそこにおいて弱くなっていたところの律法の「順守」能はぬことを、神は自らの子を罪の肉の似本性において遣わすことによつて「為した」からである、そして罪に關して、肉のうちにある罪を罰したのは、^四律法の義「の要求」が肉に即して歩まず、靈に即して歩むわれらにおいて満たされるためである。^五なぜなら、肉に即してある者たちは肉のことがらを思い、他方、靈に即してある者たちは靈のことがらを思うからである。^六なぜなら、肉の思いは死であり、靈の思いは生命と平和だからである。^七それ故に、肉の思いは神に敵する、なぜなら神の律法に従わないからである、というのも従いえないからである。^八しかし、肉にある者たちは神を喜ばすことができない。^九しかし、汝らは肉においてあるのではなく、靈においてある、いやしくも神の靈が汝らに宿るなら。しかし、もし誰かキリストの靈を持たぬなら、その者は彼のものではない。^{一〇}しかし、キリストが汝らのうちにあるなら、かたや身体は罪の故に死であるが、他方靈は義の故に生である。^{一一}しかし、イエスを死者たちから甦らせた方の靈が汝らのうちに宿るなら、キリストを死者たちから甦らせた方は汝らの死すべき身体にも汝らのうちに宿る靈それ自身を通じて生を賜うであろう。

^{一二}それ故、かくして、兄弟たち、われらは肉に對し肉に即して生きる義務ある者にあらず、^{一三}というのも、もし汝らが肉に即して生きるなら、汝らは死ぬばかりだからである。しかし、もし汝らが靈により身体の働きを殺すなら、

汝らは生きるであろう。^{一四}というのも、神の靈に導かれる者である限り、その者たちは神の子だからである。^{一五}なぜなら、汝らは再び恐れに至る奴隷の靈を受けたのではなく、われらがそのなかで「アッバ父よ」と呼ぶ、子としての定め^{一六}の靈を受けたからである。^{一六}御靈^{みたま}自らわれらが神の子たちであることをわれらの靈に共に確証する。^{一七}もし、われらが子たちであるなら、われらは相続人でもある。かたや神の相続人であり、他方キリストと共同の相続人である、いやしくもわれらが共に栄光にあずかるべく、共に苦難にあずかっているのなら。

^{一八}なぜなら、今という好機の苦難は、われらに啓示されるべく来たりつつある栄光に比して、取るに足らないとわれは考えるからである。^{一九}なぜなら、被造物の切なる憧憬は神の子たちの出現を待ち望んでいるからである。^{二〇}いうのも、被造物は空しきに服したが、それは自発によらず、服従させた方の故にであるが、^{二一}被造物それ自身が滅びの隷属から神の子たちの栄光の自由へと解放されるであろうという望みのうえのことだからである。^{二二}なぜなら、われらはすべての被造物が今に至るまで共に呻きそして共に生みの苦しみのなかにあることを知っているからである。^{二三}しかし、ただそれだけではない。靈の初の実を持つわれら自身も、子としての定めを、われらの身体の贖いを待ち望みつつ、自らのうちで呻いている。^{二四}なぜならわれらは希望により救われたからである。しかし、見られる希望は希望ではない。というのも、誰が見ているものを望むであろうか。^{二五}しかし、われらが見ないものを望むならば、忍耐をもって待ち望む。

^{二六}しかし、御靈もまた同じようにわれらの弱さにおいて共に支えてくれる。なぜなら、われらは為されるべき仕方^{二七}で何を祈るべきか知らないが、しかし御靈自ら言葉にならない呻きをもって執り成すからである。^{二七}しかし、心を探索する方は御靈の思いが何であるかを知っている、というのも御靈は聖徒のために神に対し執り成しているからであ

る。^{二八}他方、われら知る、神を愛する者たち、計画に即して召された者たちにはあらゆる事が善きことへと協働すると。^{二九}なぜなら、彼は予め知っていた者たちを、御子自身が多くの兄弟のなかの長子となるべく、ご自身の子の像と同じ形の者として予め定めもしたからである。^{三〇}しかし、彼が予め定めた者たち、その者たちを彼は呼びかけもした。そして彼が呼びかけた者たち、その者たちを彼は義ともした。しかし、彼が義とした者たち、その者たちに彼は栄光を与えもした。

三 それでは、われらはこれらのことに対し何と語ろうか。もし神がわれらの味方なら、誰がわれらの敵であるか。^{三一}ご自身の子を惜しまず、われらすべてのために彼を引き渡したその方が、いかに彼と共にあらゆるものをわれらに賜わらないということがあろうか。^{三二}誰が神に選ばれた者たちを告発するであろうか。神が義とする方である。^{三四}誰が罪に定めるのか。キリストは死んだ、いやむしろ甦り、神の右にある方であり、またわれらのために執り成す方である。^{三五}誰がキリストの愛からわれらを引き離すであろうか。艱難か、災害か、迫害か、飢餓か、裸か、危険か、それとも剣か。^{三六}まさにこう書いてある、「お前の故にわれらは終日死に渡されている、われらは屠られる羊として数えられた」。^{三七}しかし、われらはこれらすべてにおいてわれらを愛する方を介して勝ち得て余りある。^{三八}というのも、死も生命も天使も支配者も現在あるものも来るべきものも諸力も、高きものも深きものも、他のどんな被造物も、われらの主イエス・キリストにおける神の愛からわれらを引き離しうるものは何もないとわれ確信するからである。

第九章

われキリストにあり真実を語る、偽らない、わが良心が聖霊においてわれに証ししている、^二われに大きな憂いと絶えざる痛みがわがうちにあると。^三すなわち、われ肉におけるわが同族、兄弟たちのためにキリストから離され、自ら呪われてあることを祈ったのである。^四彼らは誰であれイスラエル人であり、子の定めと栄光と契約と律法判定と礼拝と約束は彼らのものである。^五父祖たちもそしてキリストも肉に即しては彼らからのものである。あらゆることからのうえにある神こそ、永遠に褒め称えられるべき方である、アーメン。

^六しかし、神の言葉が失墜したというごときものではない。なぜなら、イスラエルに基づく者たちすべてがイスラエルなのではないからである。^七彼らはアブラハムの子孫であるが故に、彼ら皆がその子供であるのではない。むしろ「イスラキ」から生まれる者」において汝の子孫と呼ばれるであろう」。^八すなわち、肉の子供たちが神の子供たちではなく、約束の子供たちが子孫とみなされる。^九というのも、約束の言葉はこうだからである、「この好機にわれは来るであろう、そしてサラに子があることになるう」。^{一〇}ただサラだけではない、レベカもまた同様であり、一人の男、われらの父イサクとの交わりにより懐妊している。^{一一}^{一二}というのも、また「二人の」子供たちが生まれず、彼らが何も善きことも悪しきことも為さざるなかで、選びに即した神の約束が業に基づかず、呼びかける方に基づき持続するために、彼は彼女に「より大きい者がより小さい者に仕えるであろう」と語ったからである。^{一三}まさにこう書いてある、「われヤコブを愛し、エサウを憎んだ」。^{一四}それでは、われらは何と言おうか。神の側に不正があるのではないか。断じて然

らず。^{一五}なぜなら、神はモーセに「われは誰であれ憐れむ者を憐れむであろう。そしてわれは誰であれ慈しむ者を慈しむであろう」と語っているからである。^{一六}それ故、かくして、それは望む者のも、駆ける者のもなく、憐れみを持つ神のものである。^{一七}というのも、書はプアラーに告げている、「われはまさにこのことのために汝を立てた。すなわち、われが汝においてわが力を証明するためでありそしてわが名が全地に告知されるためである」。^{一八}だからこそ、欲する者を彼は憐れみ、欲する者を彼は頑なにする。

^{一九}そのとき、汝はわれに言うであろう、「それでもなお何故彼は咎めるのか。というのも、彼の意志に誰が反抗してきたであろうか」。^{二〇}人間よ。神に言い逆らう汝はいつたい何者か。「造られた者は造つた者に「何故汝はわれをかくのごとくに造つたのか」と言わないであろうか」。^{二一}それとも、陶器師は同じ粘土のかたまりから或るものを尊い器に、或ものを卑しい器に造る権能を持たないであろうか。^{二二}しかし、もし神が怒りを示しそしてご自身の力を知らしめることを欲しながら、滅びにふさわしい怒りの器を大いなる寛容のうちに忍耐したのなら、^{二三}そして栄光へと予め定めたところの憐れみの器のうえにご自身の栄光の富を知らしめるためであるとするとしたら、「どうであろうか」。^{二四}その「憐れみの器である」者たちをそしてわれらをも、彼はただユダヤ人のみからではなく、異邦の民からも呼び出したのである。^{二五}ホセアの書においても、彼はまさにこう語っている、「われはわが民でない者をわが民と呼ぶであろう、そして愛されなかつた者を愛された者と呼ぶであろう」。^{二六}そして「汝らはわが民ではない」と彼らに語つたその場所において、それが起こるのである。かしこにおいて彼らは生ける神の子供と呼ばれるであろう」。^{二七}イザヤはイスラエルのために叫んだ、「たとえイスラエルの子供たちの数が海の砂のごとくであるとしても、残された者たちが救われるであろう」。^{二八}なぜなら、主は言葉を地上で確立しつつそして迅速にもたらしつつ執行するだろうからである」。^{二九}そし

てまさにイザヤは既にこう語っている、「もし万軍の主がわれらに子孫を残さなかったなら、われらはソドムのごとく
なつたであろう、そしてゴモラのごとくにされたであろう」。

三〇。それでは、われらは何と語ろうか。義を追求しなかった異邦の民が義を、しかし信仰に基づく義を獲得した。三
しかし、イスラエルは義の律法を追求しながら、律法に到達しなかった。三何故か。なぜなら、信仰に基づくことな
く、あたかも業に基づくかのごとくに「追求」したからである。彼らは躓かせる者の石に躓いたからである。三三ま
にこう書いてある、「見よ、われはシオンに躓きの石と妨げの岩を置く。そしてそのものうえに信をおく者は辱めら
れることはないであろう」。

第十章

兄弟たち、わが心の欲求と彼らにかかわる神への祈りは彼らが救いに至ることである。三すなわち、われ彼らに証言
するが、彼らは神への熱心を持つが、それは知識に即したものではない。三というのも、彼らは神の義を知らず、自ら
固有の義を確立することを追い求めており、神の義に服さなかったからである。四なぜなら、キリストは信じるすべ
の者に義をもたらす律法の終わりだからである。五というのも、モーセは律法に基づく義をこう書いている、「それら
を為した者はそれらによつて生きるであろう」。六しかし、信仰に基づく義はこのように言う、「汝は汝の心のなかで、
誰が天に昇るであろうかと言つてはならない」。それはキリストを引き降ろすことだからである。七或いは「誰が黄泉
に降るであろうかと言つてはならない」。それはキリストを死者たちのなかから引き上げることである。八しかし、そ

れは何と言っているか、「言葉は汝の近くにあり、汝の口のなかにそして汝の心のなかにある」。これはわれらが宣傳する信仰の言葉である。^九すなわち、もし汝が汝の口において主イエスを告白し、そして汝の心のうちに神が彼を死者たちから甦らせたと言信するならば、汝は救われるであろう。^{一〇}というのも、ひとは心で信じて義に至り、言葉で告白して救いに至るからである。^{一一}というのも、書は語っている、「すべて彼のうえに信をおく者は辱められることはないであろう」。^{一二}なぜなら、ユダヤ人とギリシア人の差異はないからである。というのも、あらゆる者に同じ主がおり、彼に呼びかけるすべての者たちに豊かだからである。^{一三}なぜなら、「主の名に呼びかける者はすべて救われるであろう」からである。

^{一四}それでは、信じることのなかったその方にかにひとびとは呼びかけるであろうか。聞くことのなかったその方にかに彼らは信じるであろうか。しかし、宣教する者なしにかに彼らは聞くであろうか。^{一五}しかし、遣わされなかつたなら、いかにひとびとは宣教するであろうか。まさにこう書いてある、「いかに麗しいことか、よきことを告げる者たちの足は」。^{一六}しかし、あらゆる者が福音に聞き従つたのではない。というのも、イザヤは語っている、「主よ、誰がわれらの伝聞を信じたでしょうか」。^{一七}かくして、信仰は聞くことから、聞くことはキリストの言葉を通じてである。^{一八}しかし、彼らは聞かなかつたのではないかと、われは語っているのか。いや、むしろ、「その者たちの声は全地上に響きわたつた。そして彼らの言葉は世界の果てにまで『及んだ』」。^{一九}しかし、イスラエルは知らなかつたのではないかと、われ語っているのか。誰よりもまずモーセが語っている、「われ汝ら異邦の民でない者たちのうえに嫉みを起こさせるであろう、悟りなき異邦の民のうえに汝らの怒りを抱かせるであろう」。^{二〇}他方、イザヤは大胆でありそして語る、「われはわれを探し求めない者たちに見いだされた、われを尋ね求めない者たちに現れる者となつた」。

三しかし、イスラエルに対して彼は語っている、「服従せず、言い逆らう民に、われわが手を終日差し伸べた」。

第十一章

それでは、神はご自身の民を見捨てたのではないか、とわれは語っているのか。断じて然らず。というのも、われもまたイスラエルである。アブラハムの子孫からの者であり、ベニヤミン族の者である。二神は予め知っていたご自身の民を見捨てはしなかった。それとも、汝らは、エリヤがイスラエルに対して神に訴えるとき、書がエリヤにおいて何と言っているか知らないのか、三「主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、汝の祭壇を破壊したのです。われのみ残されそして彼らはわが魂を求めています」。四しかし、応答は彼に何と言っているか、「われバアルに膝をかかめなかつた七千人を」わがために「残した」。五かくして、今という好機においても、このように恩恵の選びに即して残りの者が生じたのである。六しかし、もし恩恵によるのであれば、もはや業に基づかない、というのも、「さもなければ」恩恵はもはや恩恵とはならないからである。七それではどうか。イスラエルは追い求めているそのものを獲得しなかつたが、選ばれた者は獲得した。しかし、残りの者たちは頑なにされた。八それはまさにこう書いてある、「神は彼らに頑なさの霊を、見ることにない目を、聞くことにない耳を与えたが、それはまさにこの日にまで至る」。九ダビデもまた言う、「彼らの食卓は「彼らにとつて」網となれ、また罨となれ、そして彼らの躓きまた報いとなれ、一〇彼らの目は見ることのない闇となれ。そして彼らの背を常に曲がったものにしてください」。

二それでは、彼らは倒れるために躓いたのではないかとわれ語っているのか。断じて然らず。むしろ、彼らの罪過

によつて、救いが異邦の民のものとなり、彼ら自身を嫉妬させるためである。三しかし、もし彼らの罪過が世の富となりそして彼らの失敗が異邦の民の富であるなら、ましてや彼らの「救いの」充溢はどれほどのものであろう。

二三しかし、われ汝ら異邦の民に語る。確かに実際、われ異邦の民の使徒である限りは、われわが務めを栄光あるものとする、二四もしわれ何らかの仕方では「血」肉を嫉妬せしめそして彼らのうち幾人かを救うでもあろうなら。二五なぜなら、もし彼らの拒絶が世の和解であるとするなら、彼らの受容は死者たちからの生でないとするれば、何であるか。二六しかし、「捧げもの」初の実が聖なるものであるなら、「その粉の」かたまりもまたそうである。また、もし根が聖であるなら、枝もまたそうである。

一七しかし、もし枝の或ものどもたちが折り取られたが、汝、野生のオリーブでありながら、彼らのあいだに接木されそしてオリーブの豊かな根に共に与るものとなつたのであるなら、一八それらの枝に優越を誇つてはならない。しかし、もし汝が優越を誇るとしても、汝が根を支えているのではなく、根が汝を支えている。一九そのとき、汝は言うであらう、「枝が折り取られたのは、われが接木されるためである」。二〇よろしい。彼らは不信仰により折り取られたが、汝は信仰により立っている。高ぶつた思いを抱かず、むしろ畏れよ。二一なぜなら、もし神が自然に即す枝を惜しまなかつたなら、汝を惜しむこともないであらうからである。二二かくして、見よ、神の慈悲と峻厳とを。かたや、峻厳は倒れた者たちのうえにあり、他方、もし汝が憐れみに留まるなら、神の憐れみは汝のうえにある汝も切り取られるであらうからには。二三しかし、彼らもまた、もし不信のうちに留まることがないなら、接木されるであらう。なぜなら、神は彼らを再び接木する力ある方だからである。二四というのも、もし汝が自然に即す野生のオリーブから切り取られそして自然に反してよきオリーブに接木されたのであるなら、ましてや一層自然に即すこの者たちは自ら固有の

オリーブに接木されるであろうからである。

二五 すなわち、兄弟たち、汝らがこの奥儀を知らずにいるのをわれ欲しない、汝らが自らのがわで賢くあることのためにある。すなわち、それはイスラエルにおける一部の頑迷化が生じたのは異邦の民の充滿が到来するに至るまでである、二六そしてこうしてすべてのイスラエルが救われるであろうということである。それはまさにこう書いてある、「シオンから救う者が来るであろう、彼はヤコブから不敬虔を追い出すであろう。二七そしてわれ彼らの罪を取り去るとき、これが彼らに対するわがほうからの約束である」。二八かたや、福音に即しては、彼らは汝らの故に「神の」敵である、他方、選びに即しては、彼らは父祖たちの故に「神に」愛された者である。二九なぜなら、神の賜物として召命は変えられないからである。なぜなら、三〇まさに汝らかつて神に不従順であつたが、今やこの者たちの不従順によつて憐れみを受けたように、三一そのようにこの者たちも、今や汝らのものである憐れみによつて不従順となつたのは、彼ら自身も今や憐れみを受けるためだからである。三二すなわち、神があらゆる者を不従順へと閉じ込めたのは、あらゆる者を憐れむためである。

三三 ああ、神の富そして知恵と知識の深さよ。彼の裁きはいかに究めがたくまた彼の道はいかに追跡しがたきことか。三四 すなわち、「誰か主の心を知っていたのか、それとも誰か彼の顧問官になつたのか、三五 それとも誰か彼に予め与えてそして彼から報いを受けるのであろうか」。三六 なぜなら、あらゆるものはご自身からそしてご自身を通じてそしてご自身に至るからである。栄光は永遠に「神」ご自身にあれ、アーメン。

第十二章

かくして、兄弟たち、神の憐れみによりわれ汝らに勧め、汝らの身体を神に喜ばれる生ける聖なる献げものとして捧げよ、それは「神の」言葉に適う汝らの礼拝である。^一汝らこの世に同調するな、むしろ心の刷新により変化せよ、かくして汝らは神の意志が何であり、善とはそして喜ばれるものそしてまっただきことが何であるかを識別するに至るのである。^二すなわち、われに賜った恩恵を介してわれ汝らのうちのおのおのすべてに告げる、思うべきことがらを超えて思いあがることなく、むしろ神が各自に分け与えた信仰の量りに応じて、思慮深くあるべく思うように。^三四というのも、それは、まさにわれらはひとつの身体に多くの肢体を持つが、肢体すべてが同じ働きを持つことはないように、^五そのようにわれら多くの者もキリストにあつて一つの身体であり、一人に即して互いに肢体だからである。^六われらはわれらに賜った恩恵に即して異なる賜物を持っているので、もし預言を持つならその信仰の割合に即して、^七或いはもし奉仕を持つならその奉仕において、或いは教える者はその教えにおいて、^八或いは勧めを為す者はその勧めにおいて、分け与える者は端的に、指導する者は熱心に、憐れむ者はほがらかに「賜物を用いよ」。^九愛は偽りなきものである。悪を憎み、善に親しみつつ、^{一〇}互いに兄弟愛において慈しみ、相互に尊敬において導き手とし、^{一一}熱心に怠けることなく、靈に燃え、主に従僕し、^{一二}希望において喜んでおり、艱難において忍耐し、祈りに固着し、^{一三}聖徒の必要において分担し、旅人のもてなしに勤めている。^{一四}汝らを迫害する者たちを祝福せよ、祝福せよそして呪うな。^{一五}喜ぶ者たちと共に喜び、泣く者たちと共に泣くこと。^{一六}互いに思いを同じくし、高ぶつた思いを抱かず、低き者たちと

共にありつつ。汝ら自らのがわで賢き者となるな。^{一七}誰にも悪に対して悪を報いることなく、あらゆるひとびとの前で善き事柄に配慮しつつ。^{一八}可能なら、汝らのがわからはあらゆるひとびとと平和を保ちつつ。^{一九}愛する者たち、自ら復讐することなく、むしろ「神の」怒りに場所を与えよ。まさにこう書いてある、主は言われる「復讐はわれにある、われ報いるであろう」。^{二〇}むしろ、「もし汝の敵が飢えるなら、食べさせよ、渇くなら、彼に飲ませよ。なぜなら、こうすることによって汝は炭火を彼の頭上に積むであろうからである」。^{二一}悪によって負かされるな、善によって悪に勝て。

第十三章

すべての魂は優越する諸権威に服従せよ。なぜなら、神によるのでなければ権威は存在しないからであり、現存するものどもは神により任命されているからである。^二かくして、権威に反抗する者は神の定め^三に抵抗しているのである、抵抗している者たちは自らに裁きを招くであろう。^四なぜなら、支配者たちは善行に対して恐れ^五であるのではなく、悪行に対してだからである。汝は権威を恐れないことを欲している。善をなせ、そうすることにより汝は権威自身から称賛を受けるであろう。^六なぜなら、それは汝にとって善きことへの神の補佐だからである。しかし、もし汝が悪を為すなら、恐れよ。なぜなら、それはいたずらに剣を帯びているのではないからである。というのも、神の補佐は悪を為す者に怒りのうちに罰を与えるからである。^七それ故に、単に怒りの故にではなく、良心の故にも服従する必然性がある。^八実際、その故に汝らは税をも納めているからである。なぜなら、彼らがまさにこのことに献身している

限り、神の従僕だからである。^七 あらゆるひとびとにその負っているものどもを与えよ、税を負っている者には税を、関税を負っている者には関税を、恐れを帰すべき者には恐れを、名譽を帰すべき者には名譽を。

^八 汝ら、互いに愛することのほか、誰にも何も負うてはならない。というのも、愛する者は他の律法を満たしているからである。^九 なぜなら、「汝姦淫するなかれ」、「汝殺すなかれ」、「汝盗むなかれ」、「汝貪るなかれ」、そしてたとえ何か他の戒めがあるにしても、それはこの言葉「汝の隣人を汝自身のごとくに愛せよ」により包摂されているからである。^{一〇} 愛は隣人に悪を働かぬ。かくして、愛は律法の成就である。

^{一一} しかも、汝らは、この好機を、すなわち汝らが現に眠りから目覚める時であると知っている。なぜなら、今やわれらの救いは、我らが信じた時よりもより近くにあるのだから。^{一二} 夜は過ぎ去った、日は近づいた。だから、われらは闇の業を脱ぎ捨て、光の武器を身に付けよう。^{一三} われらは、日中にあるように慎み深く歩もう、酒盛りと酩酊によつても、乱交と放蕩によつても、争いと嫉みによつてもでない。^{一四} むしろ、汝らは主イエス・キリストを着よ、そして欲望どもへの肉の計らいを為すな。

第十四章

さて、信仰において弱い者を受容せよ、その諸疑念を裁くことなく。^二 かたや、或るひとはあらゆるものを食する信を持つが、他方、弱き者は野菜を食する。^三 食する者は食しない者を軽蔑してはならない。食しない者は食する者を裁いてはならない。なぜなら、神がその者を受容したからである。^四 他者に属する従僕を裁く汝は何者か。彼らは自らの

主人に対して立ちまた倒れる。しかし、彼は立つてであろう、なぜなら主は彼を立たせうるからである。^五或るひとは或る日が或る「他の」日に対して、他のひとはあらゆる日を「重要である」と判断している。おのおのは自らの心において完全に納得せよ。^六その日に思いを寄せる者は主にあつて思う。また、食する者は主にあつて食する。なぜなら彼は神に感謝するからである。また、食しない者も主にあつて食しない、そして神に感謝する。^七なぜならわれらの誰も自らにあつて生きることも、自らにあつて死ぬこともないからである。^八なぜなら、もしわれらが生きるなら、われらは主にあつて生きる、もしわれらが死ぬなら、主にあつて死ぬからである。かくして、生きるも死ぬるも、われらは主のものである。^九なぜなら、キリストはこのことへと、死者たちと生者たちの主となるために死に、そして生きたからである。^{一〇}しかし、汝の兄弟を裁く汝は何者か。或いは、汝の兄弟を蔑む汝もまた何者か。なぜならわれらはすべて神の法廷に立つてであろうからである。^{一一}すなわち、こう書いてある、「われは生きてゐる、主は語る、すべての膝はわれに屈み、そしてすべての舌は神を褒め称えるであろう」。^{一二}だから、かくして、われらのおのおのは神に自らについて申し開きをすることにならう。

^{一三}かくして、われらにははや互いに裁くことはすまい。むしろ、このこと、兄弟に妨げ或いは躓きを置くことのないよう、より一層吟味判断せよ。^{一四}主イエスにおいてわれ知りかつ確信している、何もかもそれ自ら穢れたものはない、ただ何か穢れていると考えるかの者にだけ穢れている。^{一五}というのも、もし汝の兄弟が食物の故に苦しめられるなら、汝は愛に即して歩んではいけないからである。キリストがその者のために死んだそのかの者を汝の食物によつて滅ぼしてはならない。^{一六}だから、汝らの善きものが侮辱されることのないものとせよ。^{一七}なぜなら、神の国は食することと飲むことではなく、聖霊における義と平和そして喜びだからである。^{一八}というのも、このことにおいてキ

リストに仕えている者は神に喜ばれそしてひとびとにも認められるからである。^{一九}だから、かくして、われらは平和のことがらまた互いに築きあげることがらを追い求めよう。^{二〇}食物のために神の業を壊してはならない。あらゆるものは清い、しかし躓かせる仕方です。食する者にはそれは悪である。^{二一}肉食しないこと、飲酒しないこと、それにより汝の兄弟が躓くものでないものは良いことである。^{二二}汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持て。識別することからにおいて自らを裁かない者は幸いだ。^{二三}しかし、もし食するさいに疑う者は咎められている、というのも信仰に基づいていないからである。信仰に基づかないことがらはすべて罪である。

第十五章

われら「信仰において」力ある者たちは力なき者たちの弱さを担いそして自らを喜ばすことの義務がある。^{二四}われらのおの隣人に対し、築きあげに関わる善きことがらにおいて喜びを与えよ。^{二五}なぜなら、キリストもまた自らを喜ばすことをしなかつたからである、むしろまさにこう書いてある、「汝を侮辱する者たちの侮辱がわがうえにふりかかった」。^{二六}というのも以前に書かれたことがらはわれらの教示のために書かれたからである、それはわれらが忍耐を通じてそして諸書の励ましを通じて希望を持つためである。^{二七}忍耐と励ましの神が汝らにキリスト・イエスに即して互いに同じく思うことを賜わるように。^{二八}それは汝らが心を一つにして口を一つにしてわれらの主イエス・キリストの神そして父に栄光を帰すためである。

^{二九}それ故に汝らは互いに受け入れよ、まさにキリストもまた神の栄光に向け汝らを受け入れたのである。^{三〇}なぜなら、

われ言う、キリストは神の真実のために、父祖たちの諸契約を証明すべく、^九他方異邦の民が憐れみの故に神に栄光を帰すべく、割礼者に仕える者となつたからである。それはまさにこう書いてある、「それ故に、異邦の民のなかでわれ汝に告白しそして汝の御名を歌わん」。^{一〇}さらに彼は語る、「汝ら喜べ、異邦の民、彼^{一〇}自身^{一〇}の民と共に」。^二そしてもう一度、「すべての異邦の民、主を褒め称えよ、そしてすべての民をして彼を賛美せしめよ」。^三さらに今度はイザヤも語る、「エッサイの根が生じるであろう、そして立ち上がる方は異邦の民を治める、異邦の民は彼に望みを抱くであろう」。^三希望の神が、汝ら聖霊の力のなかで希望に漲るべく、汝らを信じることに於けるあらゆる喜びと平安で満たし給うように。

^{一四}わが兄弟たち、われ自ら汝らについて確信する、汝ら自ら善きもので満ち、あらゆる知識を十全に備えており、互いに教えあう力があることを。^{一五}^{一六}われ汝らに幾分大胆に書いたのは、神によりわれに賜つた恩恵の故にわれ神の福音に祭司として仕えており、異邦の民へのキリスト・イエスの宣教師であることを汝らが思い起こし、異邦の民の献身が、聖霊のうちに聖別され、受け入れられるものとなるためである。^{一七}だから、われ、神に関わることがらについて、キリスト・イエスにあつて誇りを持つ。^{一八}^{一九}なぜなら、キリストが異邦の民の従順へとわれを介して言葉と行いにおいて、徴と奇跡の力において、神の霊の力において成し遂げたこと以外の何ものかをわれあえて語ることはない。かくして、われエルサレムからイルリコに至るまでの巡回においてキリストの福音を満たした。^{二〇}しかし、キリストの御名が呼ばれた場所ではないところで、福音を宣教すべくこのようにすこぶる熱心であるが、それは他者の礎石のうえに築くことのないためである。^{二一}しかし、まさにこう書いてある、「^{二二}自身^{二二}について宣教されることのない者たちが見るであろう、そして聞くことのなかった者たちが理解するであろう」。

三三それ故にまた、われ汝らのもとに至るに多くの妨げを受けてきた。三三四しかし、今やこれらの地域にわれもはや場所を持たず、スパニアに赴くときはいつであれ、汝らのもとに至る望みを多年持している。なぜなら、われ赴く途上にて汝らにまみえることを望んでおり、そして一旦汝らと心の満ちるひと時を持ったなら、汝らによりかの地に送りだされることを望んでいからである。三五しかし、今、われは聖徒たちに仕えるべくエルサレムに行く。二六なぜならマケドニアとアカイアのひとびとはエルサレムにいる聖徒たちの貧者に何らかの貢献をなすべく心に決めたからである。二七というのも、彼らはそうすることを選択したのでありまた彼らに負い目あるものだからである。なぜなら、異邦の民が彼らの霊的なものと与つたのなら、肉的なものごとにおいて彼らに奉仕する義務を負っているからである。二八かくしてこのことを実現しましたこの果実を彼らに証印したなら、汝らを経てスパニアに赴くであろう。二九しかし、われ知る、汝らに至るとき、キリストの祝福の充溢のうちに赴くであろうことを。

三〇兄弟たち、われわれらの主イエス・キリストを介してそしてまた靈の愛を介して汝らに勧める、神に対するわがための祈りの数々のうちにわれと共に結集するように。三一それはわれユダヤにある不従順な者たちから救出され、そしてエルサレムに対するわが奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなるためである。三二それは神の意志により汝らのもとに喜びのうちに赴き、汝らと共に元気を回復するためである。三三平和の神が汝らすべてと共にいますように、アーメン。

第十六章

われ汝らにわれらの姉妹、ケンクレアにある教会の執事ブオイバーを紹介する。^二汝ら聖徒にふさわしく主にあつて彼女を受け入れ、そして彼女が汝らが必要とすることがらにおいて彼女を補助するように。というのも彼女は多くのひとびとのそしてわれ自らの援助者となつたからである。

^三キリスト・イエスにあるわが同労者プリスカとアキュラによろしく。^四彼らはわが魂のために自らの首を差し出した、その彼らにただわれのみならず異邦の民のすべての教会も感謝している。^五また彼らの家の教会にもよろしく。キリストへのアジアの初の実であるわが愛するエパイネトスによろしく。^六汝らに対し多く労したマリアによろしく。キ^七わが同胞にして囚人仲間アンドロニコスとイウニアスによろしく。彼らは使徒たちのあいだでよく知られ、われより先にキリストのうちにあつた。^八主にあつてわが愛するアムブリアトスによろしく。^九キリストにあるわれらの同労者ウルバノスとわが愛するスタキウスによろしく。^{一〇}キリストにあつて陶冶されたアペレースによろしく。アリストブローロスの家のひとびとによろしく。^{一一}わが同族ヘーローディオンによろしく。ナルキッソスの家の主にあるひとびとによろしく。^{一二}主にあつて労苦しているトリュプアイナとトリュプオーサによろしく。主にあつて多く労した愛するペルシダによろしく。^{一三}主にあつて選ばれたルーポスによろしく、彼のそしてわが母によろしく。^{一四}アシュンクリトス、プレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマスそして彼らと共にいる兄弟たちによろしく。^{一五}アイロゴスとイウリア、ネーレアそして彼の姉妹またオリュムパスそして彼らと共にいるすべての聖徒によろしく。^{一六}互いに聖な

る口づけにおいて挨拶せよ。キリストの教会すべてが汝らに挨拶する。

一七 兄弟たち、われ汝らに勧める、汝らが学んだ教会から離れて分裂と躓きをもたらす者たちを警戒せよ。彼らから離れていよ。一八なぜなら、そのような者たちはわれらの主キリストに仕えることなく、自らの腹に仕えているからであり、またなめらかな語りへとつらいにより疑いなき者たちの心を欺いているからである。一九というのも汝らの従順「の消息」はすべての者たちに届いているであろうからである。だからわれ汝らを喜ぶ。しかし、汝らが善に賢くあり、悪に無垢であることをわれ望む。二〇平和の神がすみやかに汝らの足下にサタンを砕くであろう。われらの主イエスの恩恵が汝らと共にあるように。

二一 わが同労者ティモテオスが汝らによろしく、そしてわが同族ルキオスまたイアソンそしてソーシパトロスがよろしく。二三 主にあってこの手紙を筆写しているわれテルティオスが汝らに挨拶する。二四 われと教会全体の家主ガイオスが汝らによろしく。町の出納係エラストスそして兄弟コウアルトスがよろしく。

(この試訳の基礎となった研究として、拙稿『ロマ書におけるパウロの意味論——ピステイスの二相——』、『日本の聖書学』、第八号、pp.87-140、ATD・NTD 聖書註解刊行会、二〇〇三年一〇月、「トマスとルターにおける信仰と愛——徳と恩寵の両立可能性——」、中世哲学会編『中世思想研究』XLVII, pp.55-72、二〇〇五年九月、およびその増補版「トマスとルターにおける信仰と愛——徳と恩寵の両立可能性——」、『北海道大学文学研究科紀要』、第17号、pp.1-44 (Left)、北海道大学、二〇〇五年一月を参照されたい)。

この試訳の諸段階において多くの方々から励ましと助言を頂戴しました。とりわけ泉治典先生は訳業を詳細に検討し、誤りを指摘した多くの改良案を提示下さいました。記して心からの謝意を表します。